

最新の医学研究をもとにお子さんの脳を育てる京都聖母学院幼稚園の「レゼセ」の取り組みをシリーズで解説していく動画を配信していますが、このコラムはその内容を文字でもお届けするものです。

興味を持たれた方は、ぜひ、動画をご視聴いただくことをおすすめします。

保護者の方からいただいたご質問にお答えする「教えてドクター吉田」

今回のテーマは「何でも褒めないで悲しがる子ども」です。

保護者の方から、こんなご質問を頂きました。

【質問】

子どもの褒め方のコツ。

適当にできた作品（工作など）も褒めて褒めて何度もスゴイ！と言わないで悲しがります。

どうすれば良いのでしょうか。

【ドクター吉田のアドバイス】

実は最近、ご相談をいただいたようなお子さんが増えていて、親が無理をして褒め続けることで精神の成長に悪影響が出る危険性が指摘されています。

子どもの脳と心を育てるうえで褒めることは大事なことです、褒め方のポイントを間違ってしまうと逆効果になってしまう場合も多いのです。

まず、何でも褒めてもらいたがる、しかも、子どもの望み通りに褒めてあげないと落ち込んでしまったりイライラしたりする子どもが増えている理由は、20年ほど前から子どもは褒めて育てることが重要だという考え方が親の間で広がったためです。

無理に褒めようとして、心がこもっていない口先だけの褒め言葉を聞かされ、子どもは無意識のうちにそのことを感じ取り、心が満たされず、「これでは足りない！もっと褒めて！もっと褒めて！」という飢餓感が広がるのです。

もう一つの問題点は、努力しなくても褒められることで、自分は褒められて当たり前の人間なのだという傲慢な考え方が広がってしまうことです。

そのまま成長すると、大人になったあと、承認欲求が暴走するようになり、たとえば、会社で上司が褒めてくれなかったら問題行動を起こすとか、承認欲求を満たすために、SNSで誹謗中傷をしてしまうとか、社会生活が適切に営めなくなる大人になってしまう危険性があります。

子どもを成長させる褒め方の大原則は、子どもが努力をしたら、その点を指摘して褒める。

努力をしなければ、安易に褒めてはいけないということです。

といっても、子どもがどんな努力をしたかは、親にはなかなかわからないことが多いですね。

今回、いただいたご質問でも、工作などの作品を作るのに子どもが十分努力したか、親が見ただけではなかなかわからないです。

誤解してほしくないのですが、褒めるポイントは、絵や工作が上手にできたかどうかではありません。

特に幼稚園の段階では、絵や工作がうまいとか下手とか、大人の基準をおしつけて褒めるということはやるべきでないことです。

大事なのは、子どもなりに、こだわりを持って作品を作ったかどうかです。

では、親がそれを知るには、どうしたらいいのか？

答えは簡単です。

作品を作った子ども本人に聞けばいいのです。

たとえば、子どもが描いた絵を指さしながら、「この人は何をしているところなの？」とか、「ここは、どうしてこういう色にしたの？」など、いろいろ聞けば、子どもがこだわりを持って絵を描いていたら話はどんどん弾みます。

そうしたら、その部分を褒めてあげればいいわけです。

これなら、具体的に褒めてあげられるので、定型的な言葉で口先だけで褒められるよりも、子どもははるかに頑張ってよかったと実感できます。

その積み重ねで、子どもの脳と心は正しく成長していけるわけです。

逆に子どもがテキトーに描いていたら、子どもの話は膨らみません。

その場合は、褒めてはいけないのです。

こどもは、その時は悲しい気分になったり、イライラすることでしょう。

でも、それによって頑張ることの重要性を学べるので、長い目で見れば、子どもの成長に必要なプロセスだといえます。

ということで、今回は、何でも褒めないと悲しがる子どもへの対応の仕方についてお届けしました。

今後も「教えてドクター吉田」は、定期的に続けていこうと思っています。

保護者の方のご質問をお待ちしています。